



不屈の闘志を支えた夫婦愛

松本 侑壬子・ジャーナリスト

ビルマ民主化運動の指導者アウンサンスーチー氏の半生記。とりわけ、軍事政権下の反体制運動を通算15年間も自宅軟禁状態のまま率いるという不屈の闘志と、彼女を終生支えた英国人の亡夫との夫婦愛に焦点をあてて描いている。

本年6月のある日の新聞に偶然こんな紙面が。右半分には『現代のファラオ』没落』として、“アラブの春”で長期独裁者の座を追われ終身刑の判決を受けたエジプトのムバラク元大統領の顔写真。左半分には「新生ミャンマー注視」として、同国新政権により軟禁を解かれたばかりのズーチーさんが、バンコクで世界経済フォーラム参加の各国代表に、自国への投資を呼びかけている写真。去りゆく独裁者と新登場のアジアの民主化運動女性指導者一まさ大きくうねる世界の動きを象徴する、対照的な二人である。

いま、世界中の注目的、アウンサンスーチーと言えば、日本留学の経験もあり、今後のアジアの女性指導者として親近感をもつ人も多いだろう。束ねた黒髪の首元を生花で飾り、襟なしのブラウスと民族衣装の長い巻きスカート（ロンジー）姿のエレガントな姿は、既にニュースでおなじみになった。だが、個人的な人物像は案外知られていない。本当はどんな女性なのか一。

本作は、ビルマ建国の父と呼ばれた父親アウンサン将軍が1947年に暗殺された2歳から現在ま

での歩みを辿りながらその素顔に迫る。

1988年、英国オックスフォードでチベット・ヒマラヤ研究者の夫マイケル（デヴィッド・シューリス）と2人の息子と穏やかに暮らしていたアウンサンスーチー（ミシェル・ヨー）の元へ、故国ビルマで母親が倒れたとの知らせ。すぐに一人で帰国する。母親の入院中の病院に次々に運び込まれる血だらけの学生たちに驚くズーチー。1962年のクーデター以来続く軍事政権に対する民主化運動の民衆デモが手酷い弾圧を受けていたのだ。

アウンサン将軍の娘であるズーチーの帰国を聞きつけた運動家らが選挙への出馬を求めて自宅を訪ねてくる。「経験がない」と固辞するズーチーを、英国から息子らを連れてやって来たマイケルも「今がやるべきとき」と励ます。決意を固めたズーチーは、数十万の民衆の前で家族に見守られ初めて公式演説をする。「私は外国暮らしが長く、夫は英国人ではあるが、祖国への愛は揺るがない。ともに戦いましょう」と。熱狂の渦の中で43歳の女性民主化運動（NLD）の指導者ズーチーは誕生する。軍政側は自宅軟禁でズーチーの活動を抑さえようとするが、ノーベル平和賞授賞式では18歳の息子が母に代わって受賞演説、と家族の絆はかえって強まる。だが、最愛の人マイケルは英国で癌に倒れ、ズーチーは看病も看取りもできないままに帰らぬ人となる。

「私は神でも聖人でもない。しなければならぬことに身を投げ出しているだけ」と語るズーチーの言葉には説得力がある。かつては流麗なアクションでファンの多かったミシェル・ヨーだが、ここでは弱さも悩みも抱えながら懸命に使命に向かうズーチー像を違和感なく演じている。マイケルの妻への深い愛もすてきだ。

『The Lady アウンサンスーチー 引き裂かれた愛』

フランス映画（133分）／リュック・ベッソン監督

7月21日より全国ロードショー

Photo Magali Bragard © 2010 EuropaCorp—Left Bank Pictures—France 2 Cinéma

